

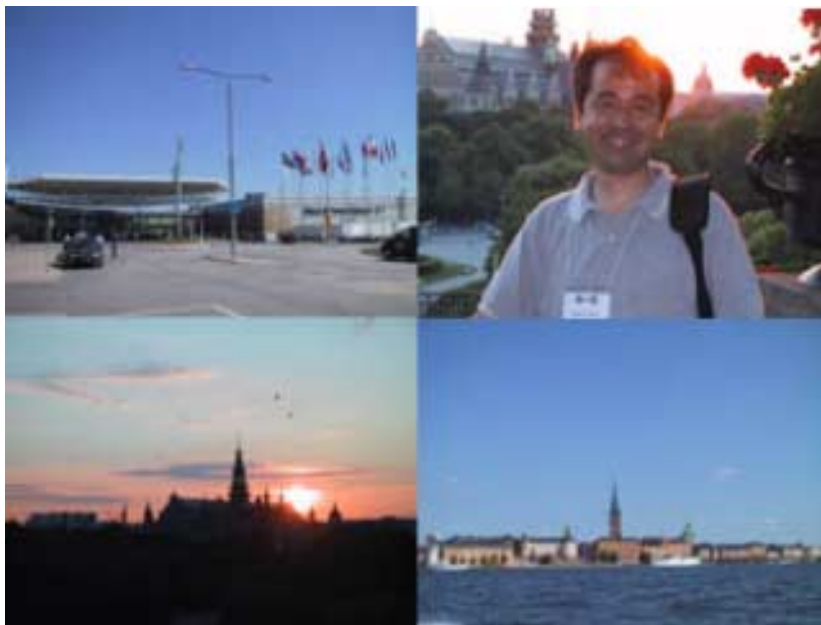
MEETING REPORT

The 11th International Congress of Immunology に参加して

感染・免疫大部門 免疫調節分野

高木 智

第11回国際免疫学会が、スウェーデン・ストックホルムにて2001年7月23日から5日間にわたり開催されました。国際免疫学会は3年ごとに開催され、今回は約5000人の参加者が五大大陸から集いました。開会前夜のオープニングセレモニーでは、Natvig 博士（学会会長）、Melchers 博士（IUIS:国際免疫学会連合会長）の挨拶から始まり、カロリンスカ研究所現職員による軽妙な司会、準備に奔走したOrn 博士（学会会計理事）の科学者とは思えない愉快的な苦労話、地元有名歌手の素晴らしい歌と実父のピアノ伴奏など、思い出深い夜が演出されました。本番になると内容の濃いシンポジウム、ワークショップが連日にわたり開かれました。午前中は14のシンポジウムが7会場で、午後は25以上にも及ぶワークショップが同時進行し、活発な議論が展開されました。当然これらの一部しか参加できませんでしたが、多くの素晴らしい研究成果を知る機会に恵まれました。参加できたシンポジウムという条件付きですが、regulatory T cell (CD25+ CD4+ T cell) による active tolerance、innate immunity と acquired immunity の接点などに関する話が随所で聞かれ、免疫学の話題の中心となっていることが感じられました。夕方にはCurrent Controversies と題して、あるテーマについて賛成と反対の立場のリーダー的研究者が前後して口演を行ない、壇上で議論するというセッションが組まれていました。冷静にかつ相手への敬意を失わず



次々と展開される議論に新鮮さと羨望を覚えました。

会場はストックホルムの中心から電車で15分程離れたところで、5000人でも十分な収容力がありました。そもそも北欧人の体格からそうですが何でも造りが大きく、また生活もゆったりとした印象がありました。道路、建物、電車どれも勿体無い程ゆとりがあり、電車が5～6分遅れるのは当たり前、カフェテリアのおじさんは長い行列にもお構いなく時間をかけて調理するといった具合で、スウェーデン人の人の良さはあの生活で培われるものだとなんげと納得しました。日が沈んでいるのは4時間弱、治安も大変良く、夜11時頃ようやく暗くなっても一人

歩きで問題なし、居心地の大変良い街でした。もちろん中世から残る優雅な建物、湖と陸地が入り組む美しい風景はどれも印象的でした。

我々の研究室からは6名が参加しました。学生諸君は初めての国際学会ということで緊張もあったようですが、十分準備を重ね力を発揮したようです。それぞれ得難い経験ができたのではないかと思います。いくつものコメントを受け私にも自身の研究をみつめる良い機会になりました。医科研で拝見するお顔もかなり頻繁にお見かけしました。これをきっかけにさらに免疫学での交流を深められればと希望しています。

編集後記



皆さんお忙しい中、快く執筆を引き受けていただきまして誠に有難うございました。皆様のご協力のお陰をもちまして無事発行の運びとなりましたこと、心から感謝いたします。

本紙についてのご意見やご投稿を歓迎いたします。編集は管理系常務委員

会と事務部庶務係で行なって参りましたが、次号から広報・情報処理委員会と庶務係で担当いたしますので、ご意見・ご投稿は広報・情報処理委員会または庶務係までお送りください。

第19号編集担当 高木 智